

山形大学病院ニュース



発行：山形大学医学部附属病院

2016 spring



病院長就任のご挨拶

山形大学医学部附属病院長 **根本 建二**

ね もと けんじ

この度山形大学医学部附属病院長を拝命いたしました。専門はがんの放射線治療で、今までは放射線治療科長、がん臨床センター長として、最先端の放射線治療装置の導入や山形大学方式として定着した診療科横断的なキャリアトリートメントボードの立ち上げなど、主にがん医療全体のマネージメントを行つて参りましたが、今後は附属病院長として山下英俊医学部長と協力をし、病院全体のより良い運営に全力を挙げる所存です。

山形大学医学部附属病院は先代の久保田功病院長をはじめ、歴代の病院長先生、スタッフの皆様のおかげで飛躍的に発展してきました。病院の再整備も終わり、病棟も外来も見違えるようになります。医療機器の整備に関しては、手術ロボットダビンチやハイブリッド手術室、術中MRIなど、県内では類を見ない先端の治療装

置が導入され、先進的な医療がより安価になります。診療科の垣根を越え医療提供体制もキャンサートリートメントボードや循環器センターなど、実質的に大変うまく機能しております。一方で、国立大学を取り巻く環境は厳しさを増しています。補助金に相当する運営費交付金は年々削減され、教員の大額な削減も必要な事態になっています。そんな中、病院の安定した運営がますます重要となつて参ります。この4月から、各種課題に迅速に対応し、中期、長期の運営戦略を立案する企画戦略室が設立されます。医学部、附属病院の飛躍のためのブレインとして機能することが期待されます。

山形大学では嘉山孝正重粒子線治療装置研究開発室長の元、炭素の原子核を加速してがんに照射する重粒子線治療装置の導入に取り組んでいます。設計も間もなく終わり、着工目前となつておりますが、建物と機械をあわせる提供体制もキャンサートリートメントボードや循環器センターなど、国費に加え、山形県、山形市、各市町村、山形県民、企業、そして職員の皆様の多額の寄附の上に計画が進められていますが、中央官庁や全国の各種集まりでも、山形大学といえど重粒子線治療と言われるほど、全国から注目されている事業です。山形の医療の最後の砦として、地域の患者さんのために最高水準の医療を提供すること、人材育成や先端的な研究に取り組んでいくことに加え、今後は、重粒子線治療施設のフル活用が病院運営の鍵となつてきます。完成予定の3年後を見据えて、情報提供と体制の整備を行つていただきたいと思います。この場をお借りして、職員の皆様の最大限の協力をお願いし、ご挨拶といたします。



先端内視鏡手術センターの設置

先端内視鏡手術センター長
かけはたせいじ
欠畠 誠治



切開による多くの外科手術は、内視鏡による低侵襲なKeyhole Surgeryによっておきかえられてきました。山形大学医学部附属病院では、年間2,200例を越える内視鏡手術が行われております、全体の手術数の約40%に及んでいます（平成26年度）。『先端内視鏡手術センター』は、内視鏡を使用する手術が従来のオープン手術と比べて患者さんにとって有益になるような使用方法、あるいは新たな使用分野の開拓を医学部一体で行い、また、内視鏡手術のコンセプトや技術を学生や若い医師に伝達教育する目的で設立された、全国でも例をみない施設です。

“Big surgeon, Big incision”という言葉にあつたように、かつて偉大な外科医はよく見える広い術野で安全に手術を行うとされてきました。しかし、裸眼で行う手術では、その精度や安全性に限界がありました。そこで、微細な構造を可視化するために手術用顕微鏡が開発され、耳の手術に初めて応用されてから脳外科や眼科、形成外科などで利用され、拡大視による手術が発展してきました。しかし、顕微鏡手術には視点の移動の問題や死角が存在する問題が残っていました。そこに登場したのが広角な視野を持ち、視点の移動が容易であり、対象への接近・拡大が可能な手術支援機器、内視鏡です。さらに内視鏡を精細なビデオカメラシステムと組み合わせることにより、コントラストや明るさが調節できるだけではなく、特殊光やカラースペクトラムの調整により、人間の眼

を越えた映像を見ながら手術ができるようになりました。今では、“Small incision, Big surgeon”と言われ、小さな切開創で低侵襲な手術を行うのが、優れた外科医であると考えられています。内視鏡を使用することで、今まで見えなかつた死角を減少させ、より安全で確実、機能的な低侵襲手術が医療の様々な分野で可能となりました。このことは患者さんにとってだけではなく、手術を行う医師にとって大きな福音となりました。

また、その一方で、近年、医療安全への社会的な関心が高まっています。医療技術の高度化に伴い、安全で安心な手術を行うための医師の手術技能の向上、更に実施される医療内容の透明性・妥当性が求められています。

先端内視鏡手術センターは、安全で確実、そして低侵襲な医療の開拓・確立・実施を目的としています。これまで消化器内科・外科を初めとし、耳鼻咽喉科、胸部内科・外科、脳神経外科、整形外科など多くの診療科で、内視鏡が各自導入され様々な術式が開拓されてきました。当センターでは、内視鏡手術を行うすべての診療科間に横串を刺し、病院として内視鏡手術のガバナンスを担当します。また、より安全で確実な内視鏡手術を実施するために、標準的な手術から高度な専門性が必要な手術まで、求められる手術技能に幅がある内視鏡手術を、その技能レベルに応じたトレーニングをつむことによって習得すること、更には当該手術のコンセプトを理解することを目指してい

ます。

当センターでは3つの柱を設定しました。

クオリティーコントロール部門では、内視鏡手術難易度分類や手術の承認、術者の条件の設定を行い、更に手術成績についても客観的な評価を行います。現在、山形大学医学部附属病院では160を越える術式が内視鏡で行われていますが、これまで他科の手術を直接見ることはありませんでした。様々な診療科の内視鏡手術を手術動画により紹介し、それを検討する手術セミナーを毎月開催しています。各診療科における手術の実際を知り、独自の工夫や最先端の技術にふれることは非常に大きな刺激もあり、病院全体のレベルアップにつながると考えています。

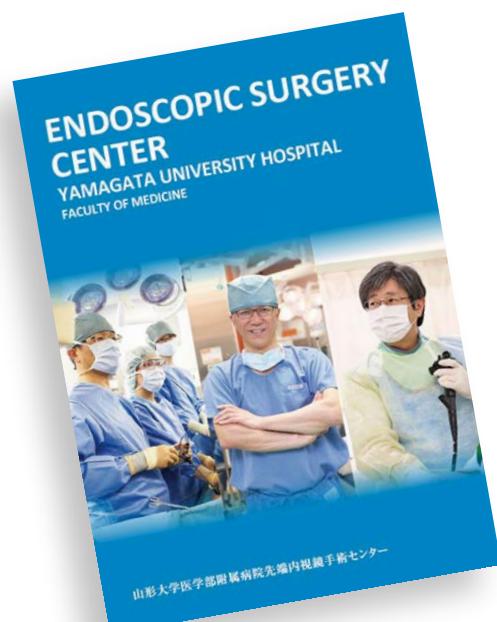
医療技術トレーニング部門では、さまざまなシミュレーターや動物を用いた手術手技トレーニング、そしてクリニカルアナトミーセンターにてより生体に近い条件でのトレーニングを行い、研修医や若手医師の技術の習得・向上をサポートします。

そして、3つめの柱として、研究開発部門では、山形大学の強みの一つである医工連携を推進させることで、世界に先駆けた、患者さんと術者の負担を限りなく軽減する手術の開拓・確立を目指しています。

最小限の侵襲で安全・確実に『命と機能を守る』ことが、最新の医工学技術により人間の「眼」を越えた「目」を手に入れたわれわれ21世紀の医療人のミッションと考えています。

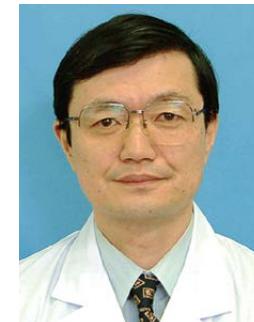


手術の様子



先端内視鏡手術センター長 欠畠 誠治
副センター長 大泉 弘幸
副センター長 牧野 直彦

3 先端医療の紹介



第二外科長
さだ ひろ みつ あき
貞弘 光章

最先端血管内治療を可能にするハイブリッド手術室

—東北初の多軸型透視撮影装置—

「ハイブリッド手術室」とは、「放射線科に設置されている透視撮影機能を有するangiオ室」と、「外科的な手技が円滑に行える清潔環境下の手術室」のそれぞれのメリットをひとつに融合させた先進的治療施設です。平成27年9月に、山形大学医学部附属病院の手術室に新設され、従来の手術室や血管撮影室単独では対応しきれなかった胸部や腹部の大動脈疾患や脳血管疾患に対する血管内治療を先進的に行うことが出来るようになりました。

高齢化社会が進むにつれて、脳血管疾患や胸部大動脈瘤、腹部大動脈瘤などの動脈硬化性疾患が著しく増加しています。これらの疾患に対しては従来、開頭、開胸、開腹という大きな侵襲を要する外科的手術による治療が一般的で、一定の治療成績が得られてきましたが、高齢患者等の高リスク患者に際しては、リスクを伴う手技もありました。最近ではこれに対する低侵襲手術として、開頭、開胸や開腹を必要としないカテーテル法を応用した血管内手術が広く実施されるようになり、これまで治療困難であった患者に対する新しい低侵襲治療として大きな注目を集めています。

以前より当院でも積極的に胸部・腹部大動脈へのステント留置術を血管撮影室で行って参りましたが、手術室エリア内に従来の血管撮影室（angiオ室）と同等以上の据付型透視撮影装置を配備した新しいコンセプトの手術室が整備されたことにより、より高度で難易度の高い血管内手術を、清潔環境下で安全に行う事が出来る様になりました。

透視撮影装置として東北「初」の導入となる「Artis zeego（ドイツシーメンス社製）」は、透視撮影装置として世界で唯一の8軸関節の回転アーム機構を有しており、従来装置では対応する事が出来なかつた多彩なポジ

ショニングに対応出来る装置となっています。また、DynaCT（ダイナシティー）と呼ばれる3次元画像をリアルタイムに作れる最新機能も搭載されており、その場で3次元画像を作り出し、病変部などの解析も可能で、手技を安全にサポートする最新機能が備わっています。更に、MQUET社の手術台と連携する事で手術台の位置・傾きに合わせて、透視角度を自動で調整する事も可能です。

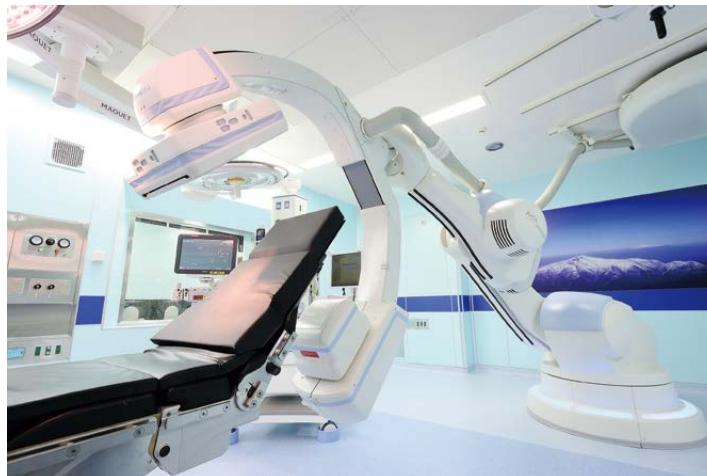
ハイブリッド手術室内には、透視画像や心臓超音波検査画像と共に患者の心電図や血圧

などの大切な情報を把握するため、60インチの大型モニターの他に大小様々なモニターを複数設置し、執刀医だけでなく麻酔医、放射線技師、看護師などの手術スタッフが手術状況を確実に共有することができます。

患者さんには、小さな創で低侵襲、手術時間も大幅に短縮でき、早い回復のため沢山の患者さんがこの治療を希望して来院しています。昨年は80症例の大血管ステント加療が行われましたが、平成28年には100例を目標としており、また、脳血管疾患と整形外科関節手術にも応用を行っていく計画です。



ハイブリッド手術室全容



8軸関節の回転機構アームを有した透視撮影装置が、ベッドに横たわった患者を挟むように自在に稼働し、多彩なポジショニングに対応可能

「認知症のための総合外来」開設

高次脳機能障害学講座 教授
すずききょうこ
鈴木 匡子



山形大学医学部附属病院では、いろいろな認知症を早期に発見し、最適な治療を行う目的で「認知症のための総合外来」を開設しました。認知症は「複数の認知機能の障害があり、社会生活に支障をきたしている状態」をさし、患者数は500万人とも言われています。その原因には、よく知られているアルツハイマー病だけでなく、脳の様々な病気が含まれます。また、一見すると認知症と間違えやすい他の症状もあります。ですから、まずは認知症かどうかを診断し、次にその原因となる疾患を明らかにして、原因となっている病気に応じた適切な治療を進めていくことが大切となります。

当院の「認知症のための総合外来」は、大きく3つの特徴があります。ひとつは、「精神科・高次脳機能科・第三内科」が共同で診療にあたるということです。このように3つの診療科が関わって個々の患者さんにとって最適な治療を検討できる体制は、全国的にみても数少ないと考えられます。認知症は原因、症状が多様であり、診断には多角的な診かたが必要です。当院では合同カンファレンスで各科の専門的な視点から意見を交わすことにより的確に診断・治療できるようにしています。

二つ目は、認知症とその原因疾患の診断がついた後に、それぞれの病気に応じた治療・療養へのサポートをすることです。本院の地域医療支援センターを介して、地域の医療機関・介護保険施設等と連携をとり、長期的な治療・介護の計画を立てることになります。認知症の治療は、薬物療法だけでなく、周囲の対応を含めた非薬物療法が非常に重要です。認知機能障害があっても適切な環境を整え、活動性を保つことにより、日常生活での困難さを

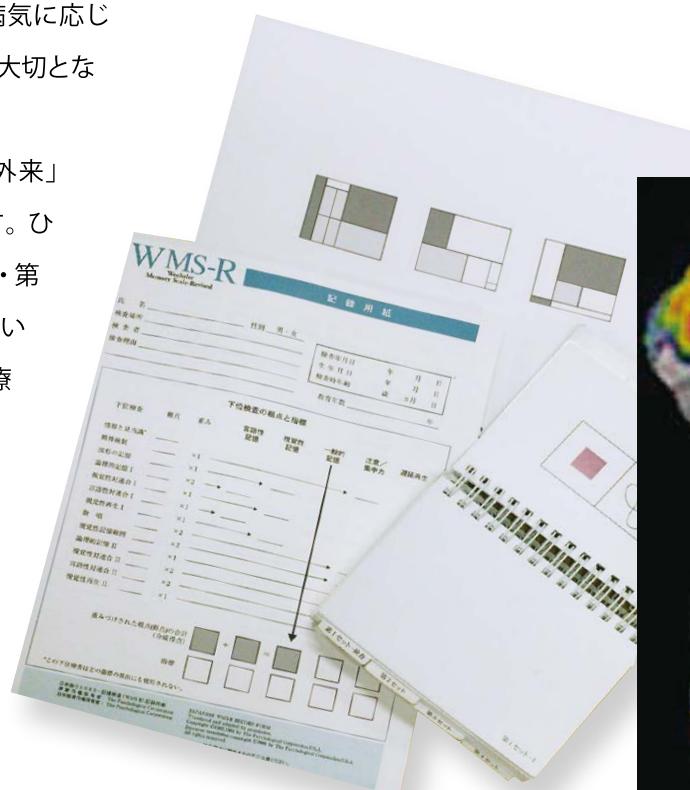
軽くすることができます。

三つ目は若年性認知症の患者さんの診断・治療に力を入れていることです。認知症はけっして高齢者だけのものではなく、40代、50代でも発症することがあります。65歳未満で発症する場合を若年性認知症と言い、全国で4万人ほどいると推定されています。もの忘れ以外の認知機能障害で発症する場合もあり、診断までに時間がかかる場合が多いとされています。また、働き盛りであるため

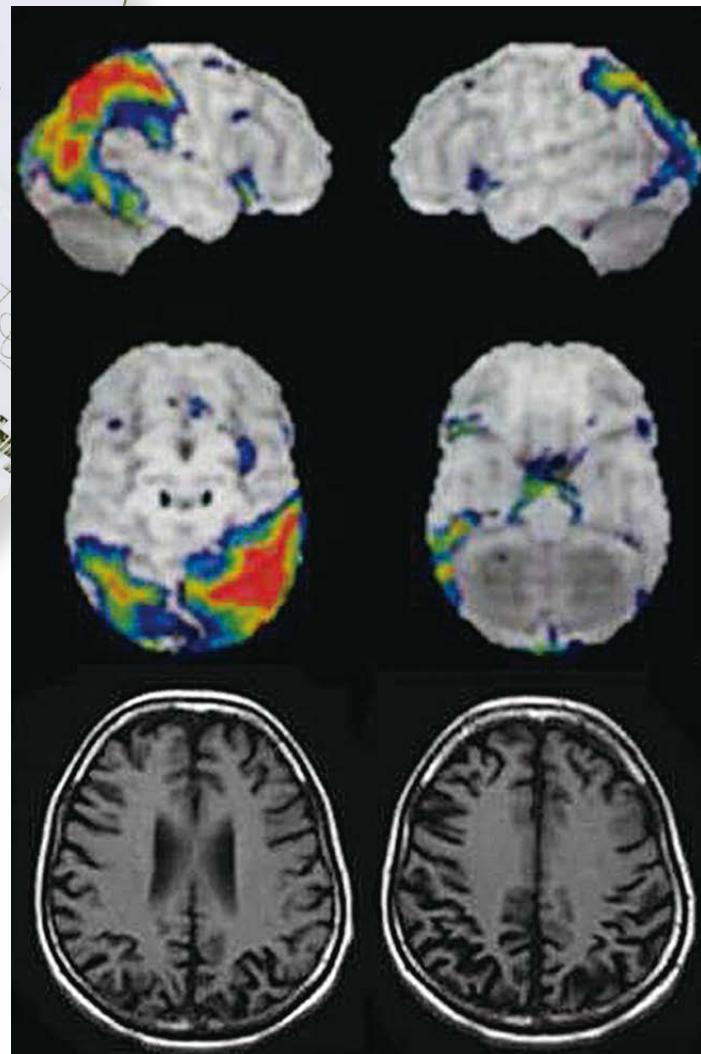
社会や家族への影響が大きく、

を常に臨床にフィードバックしながら診療を行うことができます。

認知症診療は時間をかけて患者さんやご家族のお話を聞き、診察する必要があるため、初診は完全予約制になります。かかりつけ医から地域医療連携センターへ連絡いただき、予約をお願いします。今後は地域医療機関や山形県の関係部署等との連携をさらに強め、できるだけ多くの患者さんが、認知症になってもよりよい生活ができるよう「認知症のための総合外来」を充実させていきたいと考えています。



神経心理学的検査



認知症診断のための神経機能画像
〔上はSPECTで血流低下部位を示します。
下はMRIで脳の萎縮の程度などをみます。〕

血液内科診療体制の充実について —無菌室の整備—

血液・細胞治療内科学講座 教授 いし ざわ けん いち 石澤 賢一



血液内科で診療の中心となるのは、白血病、悪性リンパ腫、骨髓腫などの造血器腫瘍です。治療は複数の抗がん剤を使用する多剤併用化学療法が中心となります。造血器腫瘍は化学療法の効果が高いため、通常“治癒”を治療目標として、患者さんが耐えられる限界近くの量まで抗がん剤を投与します。したがって化学療法後には高度の血球（白血球、赤血球、血小板）減少が遷延します。特に急性白血病の治療では、白血球数 $500/\mu\text{l}$ 未満、好中球ほぼゼロの状態が1-2週間以上持続するため、感染対策が重要となります。また難治性の症例の場合、造血幹細胞移植が選択されます。これは全身の放射線照射と大量

の抗がん剤投与により骨髄機能を廃絶させて、その後造血幹細胞を移植するものです。移植した造血幹細胞が機能し血球を造りだすまで、約二週間を要します。この間白血球がほとんどない状態が持続するため、やはり感染症に対する厳重な管理が必要となります。このように血液疾患の診療では感染対策が極めて重要な位置を占めており、その対応が治療成績を左右するといっても過言ではありません。感染対策では標準予防策が基本となります。それに加えて、血液疾患では無菌室管理が有効です。

これまで当院では、無菌室2床で運用していました。県内の骨髄バンク認定施設が当

院のみであり、県内の非血縁移植症例の全てが集中するため、無菌室は移植症例のみに使用しており、移植症例以外は一般病室で管理していました。このような状況を改善するため、今回無菌病床4床が10階西病棟に新設されました。本格稼動後は無菌病床6床体制となり、急性白血病等の血球減少が遷延する患者さんや、移植片宿主病で大量の副腎皮質ホルモン長期投与が必要な患者さんにも無菌室管理が可能となるため、治療成績の向上につながる考えています。

最後に昨今の厳しい医療情勢のなか、今回の無菌室整備をご理解、ご尽力いただいた関係各位に深謝いたします。

山形大学蔵王協議会と山形県医師会が連携し 「山形県医療安全支援協議会」を設立

「山形県議会」を同立しました。本制度死亡事故合、その医院内調査を実行する「医療事務センター」に明説するうられておられました。機関は、専門機関による調査等の必要性を認めることにいたしました。

では、予期せぬ
が発生した場
第三者機関であ
故調査・支援や
報告及び遺族に
ことが義務づけ
院内事故調査を
支援を医療事
な支援団体に求め
支援団体によっています。

県医師会、山形県内所在等支援団等の支援の在り方をきたとこなく、歯科薬師など、療人で新立し、山形の支援となりました。本協議会は、孝正山形会長、顧問形県医師協議会の

形県薬剤師会、山形県歯科医師会など、山形県の医療事故調査体間でこれまでの方を協議して、医師だけでオール山形の医師に協議会を設け、県内医療機関へ開始することになりました。

支援委員会」「調査委員会」設立支援委員会」「調査委員会告書作成支援委員会」の5つの委員会を設置し、県内の各医療機関からの相談、専門家の派遣、医療事故調査・支援センターへの報告のアドバイスなどを行います。



第1回山形県医療安全支援協議会の様子 (写真中央:嘉山会長)



第1回山形県医療安全支援協議会終了後の記者会見 (右から徳永顧問、嘉山会長、栗谷副会長)

TOPICS



感謝状贈呈式の様子

山形県コホート研究(Yamagata Study)

ベースライン調査2万人超達成

引き続き、コホート研究の第一人者であり、本学客員教授である国立がん研究センターの津金昌一郎がん予防・検診研究センター長から、「コホート研究の意義」と題して講演が行われ、盛会のうちに終了しました。

研究代表者の嘉山孝正医学部参与が、これまでの支援に対し御礼のあいさつを述べた後、関係自治体、医師会、関連団体に対して感謝状を贈呈しました。

式では山形県コホート研究・研究代表者の嘉山孝正医学部参与が、これまでの支援に対し御礼のあいさつを述べた後、関係自治体、医師会、関連団体に対して感謝状を贈呈しました。

山形大学医学部では、平成27年12月8日（火）、山形市内のホテルを会場に本学部が推進している山形県コホート研究（Yamagata Study）のベースライン調査が、目標としていた2万人を超えたことから、これまで本研究に対しても大なるご尽力・ご協力をいただき

本研究は、生活習慣に加え、遺伝子解析を含むゲノムコホート研究として、日本でも有数の規模を

いた関係自治体、医師会及び検診センター等への感謝の意を表するため、270人を超える出席者のもと感謝状贈呈式を開催しました。



嘉山孝正医学部参与からの挨拶

関係団体等への感謝状贈呈式を挙行

山形大学医学部附属病院 ホームページをリニューアルしました

山形大学医学部附属病院のホームページが、平成27年6月1日より新しくリニューアルされました。

リニューアルされた新しいホームページは、ご覧いただく皆様にとって、よりシンプルで分かりやすいデザイン・内容に一新されましたので、ぜひ、ご活用いただければ幸いです。

今後も、本院における最先端医療についての最新情報や、来院される患者さんに安心して受診いただけるような情報を提供して参りますので、引き続き、よろしくお願ひいたします。

ホームページはこちらからご覧いただけます。↓

山形大学医学部附属病院ホームページ:
<http://www1.id.yamagata-u.ac.jp/>





構内環境美化活動について

山形大学医学部附属病院では、来院者用駐車場南側と患者サービス棟東側花壇に花を植え、来院者に安らぎを与えると共に附属病院の環境美化を図ることを目的に、毎年6月と10月に事務部各課事務職員の協力を得ながら構内環境美化活動を実施しています。

実施に当たり、具体的には、本院の環境整備担当部署が、各課の協力が得られるように実施日を決めてから計画しています。その後、何種類もの花の中から長期に咲く色とりどりの花を選択し、必要本数を準備しています。

植える時期が近づく3週間前には既存の花を抜き取り腐葉土、苦土石灰、肥料等を攪拌し整地まで事前にを行い、整地された花壇に植栽する位置を割り出しています。準備をしている間にも来院された方から「今度はどんな花を植えるのですか?楽しみだわ!」等と声を掛けられます。当日は、協力者が集合したところで、花の納入業者から植えるポイントを指導してもらい、各自が位置出したところへ移植ペラで植え付け作業を行っています。



これと平行して敷地の周囲にある側溝と駐車場等構内周辺のゴミ・落葉等を拾い集めています。

このように、沢山の方の協力を得ながら「環境美化デー」と称した活動は成り立っているのです。

今後、病院の再開発の一環として、基幹環境整備工事に着手する予定です。この工事は植栽している花壇にも手を加える予定ですが、整備後も来院される方々が心を癒やせるような空間になれば良いと願っています。

たった1日の活動ですが、数日経つと植栽された花は見事に咲き、約半年間来院される方の目を和ませることとなります。地道な活動ではありますが、今後とも毎年「環境美化デー」を継続していく予定です。



石坂公成博士 足跡記録展示場を開設



石坂氏から学生へメッセージ

山形大学医学部では、平成27年3月に開所したがん研究センター内に「石坂公成博士足跡記録展示場」を開設しました。

日本学士院会員で本学特別招聘教授、ラホイ

ヤアレルギー免疫研究所名誉所長の石坂公成氏は、1966年に照子夫人との共同研究により発見したアレルギーの原因となる免疫グロブリン（IgE）を発表し、米国を拠点に、長年世界をリードしてきた、免疫学研究の第一人者です。医学部では、平成25年10月に石坂氏から、勲二等瑞宝章、文化勲章をはじめとする国内外で同氏が受賞された賞、学術論文、著書など97点の貴重な資料の寄贈を受けました。この度開設した展示場では、同氏の永年に亘る研究の足跡や医学の世界における功績等をまとめた19枚のパネルを展示しています。

平成27年4月28日に開催したお披露目の会には、学生約100名が出席しました。展示パネルの除幕の後、嘉山孝正医学部参与から、寄贈品及びパネルについて、「先人達のこれまでの足跡を知ることは非常に重要であり、学生たちが歴史的で偉大なものを見ることによって得

るものは計り知れない。医学教育・研究にとって宝である。」と紹介し、石坂氏への謝意が述べられました。

続いて、石坂氏から、戦争中に学生生活を送った経験や米国での研究への取組みなどこれまでの自身の研究生活を振り返り、学生たちには、「自身のやりたいことに前向きに取り組んでほしい。」との熱いメッセージが送られました。出席した学生たちは、石坂氏のこれまでの功績や貴重な寄贈品の数々を見て、目を輝かせている様子でした。



手前中央 石坂公成氏

人事往来

27.4.1 武蔵野大学薬学部 講師 水野 大 採用 准教授 法医学講座
27.4.1 公衆衛生学講座 助教(テニュア・トラック教員) 川崎 良 採用 准教授 公衆衛生学講座
27.4.1 メディカルサイエンス推進研究所 生化学解析センター 助教(テニュア・トラック教員) 越智 陽城 採用 准教授 メディカルサイエンス推進研究所 生化学解析センター
27.4.1 メディカルサイエンス推進研究所 生化学解析センター 助教(テニュア・トラック教員) 田中 敦 採用 准教授 メディカルサイエンス推進研究所 生化学解析センター
27.4.1 新生児集中治療室 講師 佐々木綾子 昇任 准教授 新生児集中治療室
27.4.1 地域看護学講座 助教 森鍵 祐子 昇任 准教授 地域看護学講座
27.4.1 耳鼻咽喉科 助教 伊藤 史 昇任 講師 耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座
27.4.1 小児科 助教 沼倉 周彦 昇任 講師 小児科
27.4.1 新生児集中治療室 助教 若林 崇 昇任 講師 小児科
27.4.1 脳神経外科学講座 教授 嘉山 孝正 採用 特任教授 プロジェクト教員(教授相当) 先進がん医学講座~29.3.31
27.4.1 検査部 副臨床検査技師長 渡辺 俊夫 昇任 臨床検査技師長 検査部
27.4.1 放射線部 副診療放射線技師長 岡田 明男 昇任 診療放射線技師長 放射線部
27.4.1 栄養管理部 副調理師長 江口 聰 昇任 調理師長 栄養管理部
27.4.30 小児科 講師 若林 崇 要請退職(山形県立中央病院へ)
27.5.1 東北大学大学院医学系研究科 准教授 園田 順彦 採用 教授 脳神経外科学講座
27.6.1 麻酔科 助教 岡田 真行 昇任 講師 麻酔科
27.7.1 高次脳機能障害学講座 助教 斎藤 尚宏 昇任 講師 高次脳機能障害学講座
27.7.31 国立研究開発法人放射線医学総合研究所重粒子医科学センター病院医長 野宮 琢磨 採用 准教授 がん臨床センター
27.7.31 がん臨床センター 准教授 野宮 琢磨 退職(神奈川県立がんセンターへ)
27.9.30 第二内科 講師 渡辺 久剛 退職(東北中央病院へ)
27.10.1 内科学第二講座 助教 奥本 和夫 昇任 講師 第二内科
27.11.1 秋田大学大学院医学系研究科 准教授 土谷 順彦 採用 教授 腎泌尿器外科学講座
27.12.31 皮膚科学講座 准教授 片桐 美之 退職(開業へ)
28.1.1 皮膚科 講師 川口 雅一 昇任 准教授 皮膚科学講座
28.1.1 皮膚科 助教 林 昌浩 昇任 講師 皮膚科
28.1.1 皮膚科 助教 紺野 隆之 昇任 講師 皮膚科
28.1.31 眼科 講師 望月 典子 退職(山形県立中央病院へ)
28.3.1 脳神経外科学講座 准教授 櫻田 香 昇任 教授 基礎看護学講座
28.3.31 内科学第一講座 教授 久保田 功 退職(山形大学理事・副学長へ)
28.3.31 臨床看護学講座 教授 横山 浩之 退職(福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター教授へ)
28.3.31 第三内科 講師 和田 学 退職(山形県立中央病院へ)
28.3.31 産科婦人科 講師 高橋 俊文 退職(福島県立医科大学教授へ)
28.3.31 看護部 看護部長 那須 景子 定年退職(山形厚生看護学校へ)

編集後記

Editorial Note

病院ニュース「Health&Safety」第26号をお届けします。

今回は、4月1日より新たに病院長に就任した根本新病院長のご紹介を始め、「先端内視鏡手術センターの設置」、「ハイブリッド手術室の新設」、「認知症外来の開設」、「血液内科診療体制の充実」など、山形大学医学部附属病院の先端医療のご紹介をさせていただきました。

なかでも、平成27年9月に本院手術部に新設された「ハイブリッド手術室」は、東北初の導入となる多軸型透視撮影装置を有しており、より高度で難易度の高い血管内治療が可能となった最先端の医療として、今後の期待が高まっています。

また、長い間ご不便をお掛けしておりました医学部附属病院再整備計画も、昨年度中にすべての改修が完了し、より快適な環境での医療の提供が可能となりました。皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。

今後とも、より安心・安全な医療の提供に努めて参りますので、よろしくお願い致します。

病院ニュース編集担当 総務課庶務

学会賞等受賞

CONGRATULATIONS

阿部 祐紀 第一内科 第55回日本呼吸器学会学術講演会 研修医トラベルアワード.....平成27年4月
柴田 健一 外科学第一講座 第106回日本外科学会定期学術集会記念・外科手術研究助成基金賞.....平成27年4月
佐藤 裕康 第三内科 2015年度大日本住友製薬株式会社(神経内科領域)研究助成賞.....平成27年4月
富田 恭子 内科学第二講座 第51回日本肝臓学会研究奨励賞.....平成27年5月
佐藤 裕康 第三内科 2015年度公益信託「生命の彩」ALS研究助成基金研究助成賞.....平成27年5月
吉澤 順子 皮膚科 JD Best Paper Prize 2014 The Journal of Dermatology 論文賞.....平成27年5月
大泉 弘幸 外科学第二講座 日本フルードパワーシステム学会学術論文賞.....平成27年5月
佐竹 寛史 整形外科学講座 第88回日本整形外科学会優秀演題賞.....平成27年5月
渡邊 具史 麻酔科 第24回日本集中治療医学会東北地方会優秀演題賞.....平成27年5月
阿部 知世 検査部 山形県臨床検査技師会奨励賞.....平成27年5月
和田 由美 検査部 山形県臨床検査技師会功労賞.....平成27年5月
山浦 玄斎 第一内科 第160回日本循環器学会東北地方会 Young Investigator's Award 症例発表部門優秀賞.....平成27年6月
新関 武史 内科学第一講座 TOPIC 2015 EVT Case Competition 優秀賞.....平成27年7月
亀井 啓太 第一内科 (財)地域医学研究基金 腎疾患と高血圧研究会第27年度研究助成金奨励賞...平成27年7月
林 思音 眼科 第35回日本弱視斜視学会学会賞.....平成27年7月
大江 倫太郎 病理診断学講座 第25回日本樹状細胞研究会奨励賞.....平成27年7月
八木 周 第二内科 第51回日本消化器病学会大会 (JDDW2015) デジタルポスター優秀演題賞...平成27年10月
林 思音 眼科 第5回日本弱視斜視学会若手支援プログラム賞.....平成27年10月
伊藤 恒賢 動物実験センター 第18回業界アワード日本実験動物協同組合賞平成27年10月
芳賀 弘明 第二内科 The Liver Meeting 2015 AASLD Fellow Research Award平成27年11月
芳賀 弘明 第二内科 The Liver Meeting 2015 AASLD Presidential Poster of Distinction ...平成27年11月
佐藤 裕康 第三内科 2015年度武田科学振興財団医学系研究奨励賞平成27年11月
阿部 優子 皮膚科 日本色素細胞学会 溝口昌子賞平成27年11月
橋本 直士 内科学第一講座 第161回日本循環器学会東北地方会 Young Investigator's Award 症例発表部門優秀賞.....平成27年12月
新関 武史 内科学第一講座 YES CLUB 2015 Case Competition部門 Best Award.....平成27年12月
嘉山 孝正 先進がん医学講座 第65回河北文化賞.....平成28年1月

*所属については、受賞時のものである。

ISO9001に対する維持活動について

本院では、医療の質の向上を目的として平成16年2月にISO9001を取得しました。ISOの要求事項を満たすため、毎年各部門において品質目標と、その達成に向けた活動計画を立案し、目標達成に向けて職員一丸となって取り組んでおります。

ISOを維持するための活動として、新任ISO推進委員に対する説明会、事務局会議、内部監査員養成研修、内部監査実施前説明会、P DCAサイクル事例発表会等を開催するとともに、本院の品質マネジメントシステムがISOの要求事項を満たしているかを確認するために内部監査を実施し、是正や改善を行っています。

また、品質マネジメントシステムを改善又は変

更する必要性がないか、品質方針・品質目標を変更する必要性がないかを検討するために、年2回のマネジメントレビューを実施しています。その他に、外部審査機関による審査も年に1回実施されています。これらの活動を通じて、品質マネジメントシステムの維持、発展に努めています。

